

わが恩師のことども

鏡 味 國 彦

時の経つのは、速いもので、私が昭和三十九年四月に助手に就任してからすでに三十年の歳月が流れた。学生時代から数えると、実に三十四年間も立正大学文学部のお世話になったことになる。この間に薫陶を受けた諸先生の思い出に触れつつ、私の辿って来た途を振り返ってみたい。

私が立正大学の英文科の三年に編入学したのは、昭和三十五年四月のことである。その前の二年間、国際短期大学（旧中野無線）の英文科で本間久雄（世紀末文学・比較文学・明治文学研究家）、栗原古城（上田敏・夏目漱石・平田禿木の門下生。カーライル・ラスキン・ギittings・メーテルランク・エマソン・ステイブンスンな

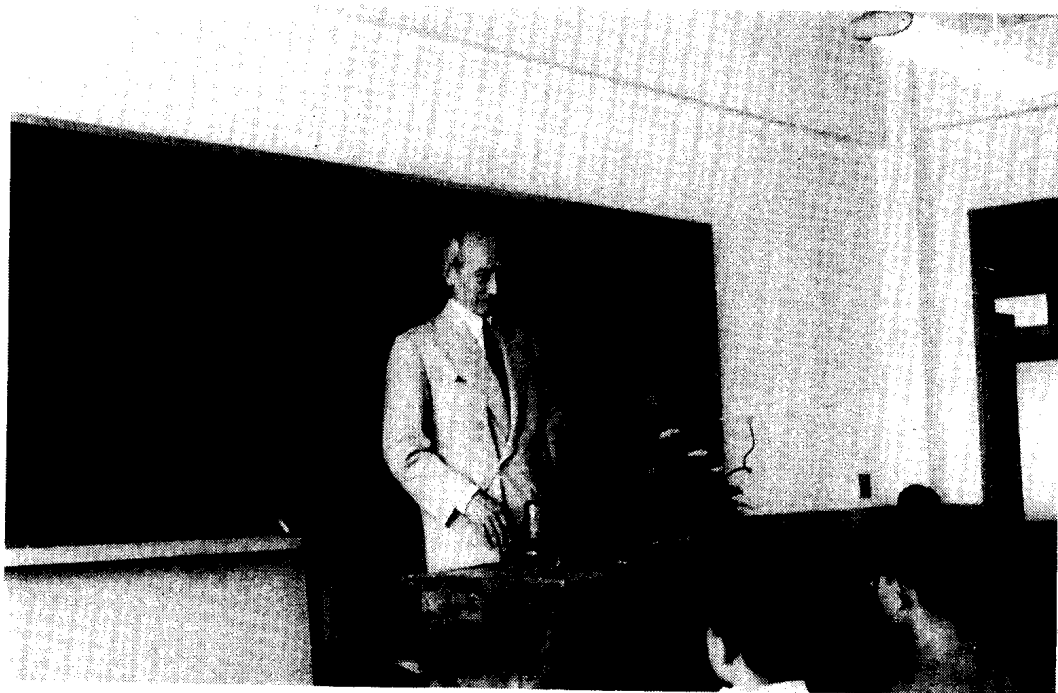
どの紹介者・翻訳家）、市川又彦（B・ショウなど英国演劇の紹介者・研究家）、坪内士行（逍遙の甥。シェイクスピアの研究家・翻訳家）などの先生に教えを受けていた。当時、作家を志していた私は、これらの著名な先生方が専任教授として、または非常勤講師として教鞭をとっておられた文学部に編入学したわけである。三年生の時、J・ブリンクリー先生から「英文作法」と「英文学講読」とを、中島末治先生（元教養部長・名誉教授）から「英国演劇史」を教わったのも懐かしい思い出である。

ブリンクリー先生は、一九二〇年代のパリでジョイスや、ヘミングウェイ、フィッツジェラルド、アンドレ・



昭和五十八年度 立正大学 英文学科卒業記念 昭和 57.3.

下段右より 筆者・國友慶一・中島末治・栗原古城・佐瀬順夫・安藤幸雄



J・ブリンクリーの最終講義

ジッド、ラルボーなど、所謂モダニストたちの近くにいたとお聞きしている。

さて、昭和三十七年三月に英文科を卒業した私は、指導教授の古城先生と相談の上、同年四月に立教大学大学院修士課程英米文学専攻へ進んだ（立正大学にはまだ英米文学専攻はなかった）。この二年間に教えを受けたのは、島田謹二（フランス派比較文学）、山宮允（詩人・歌人・英文学者）、鈴木重威（東京都立大学名誉教授・古英語・古英詩）、杉木喬（米文学）、細入藤太郎（米文学）先生たちである。

昭和三十九年三月に修士課程を修了した私は翌月、母校の助手に任ぜられた（その前の一年間は副手）。

立正大学大学院英文学専攻が設置されたのは、昭和四十年四月のことである。しかも博士課程・修士課程が同時に設置された。これは異例のことと言えよう。これに関わった方々の苦労たるや察しても余りあるものがある。大学院英文学専攻発足当時のスタッフは、専任教授として本間久雄、栗原古城、久野朔郎（元愛知県立大学長・



下段左より 佐瀬順夫・中島末治、上段左より 本間久男・杉本喬・市川又彦・安藤幸雄・筆者・成沢和子・仁木勝治

英語学）、佐瀬順夫（元文学部長・名誉教授・米文学）、杉本喬（立教大学を定年退職し、立正大学に移る）、市川又彦の諸先生、それに、非常勤講師として鈴木幸夫（英文学・ジョイス研究家）、高津春繁（西洋古典文学）、

坪内士行先生などが加わった。後に尾島庄太郎先生（イエイツなどアイルランド文学の権威）や鍋島能弘先生（文体系美学）も専任教授として加わった。

鈴木幸夫先生（当時早稲田大学文学部教授）は、日高只一先生（立正大学英文科第二代主任・英米文学・ポランド文学・民間芸能研究家）の門下生で、推理小説の翻訳にも多くの業績を残しておられるだけではなく、自らも推理小説を書いておられた。

ここで大学院設置当時のことで、特に一言しておきたいのは、これを記念して昭和四十年から四年間連続して行われた「英文学教養講座」（英文科・英文学会共催）である。その中から主なものを挙げてみたい。先ず、昭和四十年には、本間久雄「英文学移入史」、本多顕彰「シェイクスピアと日本」、栗原古城「夏目漱石と英文学」、矢野峰人「明治新詩に及ぼせる英詩の影響」、続いて四十年には、坪内士行「坪内逍遙」、海老池俊治「夏目漱石」、西崎一郎「小泉八雲」、次いで四十二年には、西川正身「南部の文学について…フォークナーを中心とし

て」、本間久雄「所謂世紀末」、尾島庄太郎「イエイツと日本」、四十三年には、佐藤輝夫「フランソワ・ヴィヨンとイギリス」、島田謹二「芥川龍之介と英米文学」、笹淵友一「明治初期の文学とアメリカ文学」、昭和四十四年には、塩田良平「獨歩とワーズワース、ツルゲーネフ」、吉武好孝「日本の近代化と英米文学」、尾島庄太郎「イエイツと能」、本間久雄「浮世絵と英国世紀末」など、斯界の第一人者による講演である。これらの講演を拝聴して私たち若い者は、大いに研究心を掻き立てられたものである。こうした講演会は、わが英文学会において今後も毎年行われている。

私が比較文学・文化を専攻するようになったのは、上記の諸先生の薫陶を受けたお陰である。とりわけ、本間久雄、栗原古城、市川又彦、中島末治、佐瀬順夫、坪内士行、鈴木幸夫先生らには、十年以上に亘って教えを受けた。また、島田謹二先生に教えを受けたのは、立教時代の二年間に過ぎないが、その数々の著書を通じて多くのものを吸収することが出来た。これらの碩学から外国

文学の醍醐味を満喫する基礎と、あくまでも東洋人、特に日本人として外国文学をどう見るかという態度を学んだ。拙著『ジェイムズ・ジョイスと日本の文壇』（昭和五十八年五月、学位論文）、『十九世紀後半の英文学と近代日本』（昭和六十二年五月）、『ダンテ・ゲイブリエル・ロセッチと明治期の詩人たち』（平成二年九月）、『古城栗原元吉の足跡』（平成五年六月）などがその成果である。私が今日あるのは、これらの諸先生に負うところが大なのである。

最後にわが学科の教育目標に触れておきたい。言うまでもなく、英米文学科は、英米文学、英語学の研究を主な目的としている。しかしながら、文学（文化）、語学に関わる以上、英語の総合的な力、すなわち読み、書き、聞き、話す力に熟達しなければならない。そうした力は一朝一夕で身につくものではなく、不断の地味な努力によつてのみ身につくものである。したがって、われわれは英語の習熟にも大きな比重をおいている。それとともに、英語さえ自由に操ればよいというような「浅薄な

英語屋」を育てるのではなく、文学、英語（その背景となる諸外国の文化、語学を含めて）の教育と研究を通じて広い健全な視野と創造性豊かな精神を備えた人材を育成することを目指している。これが創立以来（文学部文学科英文学専攻として、大正三年にスタート。初代主任教授加藤朝鳥・英米文学・ポーランド文学）のわが学科の伝統である。